

## MCLS に於けるアスピリン血中濃度

日赤医療センター小児科 川 崎 富 作  
今 田 義 夫

〔目的〕：MCLS 患者に投与したアスピリンの血中濃度を知り最適量を決定する事にある。

〔方法〕：投与量，病日，投与日数に分け考察し，アスピリン投与後3時間目に採血した。投与量は 50 mg/kg, 70 mg/kg, 100 mg/kg の3群に分けた。

〔成績〕(A) 50 mg/kg 投与群

19名の患者，延べ28検体につき行った。アスピリン投与日数は3日から36日までであった。最高血中濃度は17.2 mg/dl であり，最低血中濃度は1.8 mg/dl で平均血中濃度は  $6.4 \pm 3.8$  mg/dl であった。

(B) 70 mg/kg 投与群

7名の患者，延べ9検体につき行った。アスピリン投与日数は3日から29日までであった。最高血中濃度18.1

mg/kg，最低血中濃度は2.7 mg/kg であり，平均血中濃度は  $8.8 \pm 4.5$  mg/dl であった。

(C) 100 mg/kg 投与群

13名の患者，延べ15検体につき行った。アスピリン投与日数は1日より51日までであった。最高血中濃度は21.3 mg/dl，最低血中濃度は1.5 mg/dl であり，平均血中濃度は  $15.6 \pm 7.3$  mg/dl であった。

〔結果〕：アスピリン50 mg/kg, 70 mg/kg 投与に於ては投与日数，病日に関係なくほとんどが10 mg/dl 以下の低い血中濃度しか得られず，100 mg/kg 投与群に於てのみ，投与日数，病日に関係なくほとんどが15 mg/dl 以上の高い血中濃度が得られた。

## MCLS 患児における治療法，浅井，草川の スコアと冠動脈病変との関係

日赤医療センター小児科 川 崎 富 作  
藺 部 友 良

〔目的〕：①冠動脈病変の発生を防止する為に最良の治療法を見いだす事

②冠動脈病変と臨床症状特に浅井，草川のスコア表との相関を見る事

〔方法〕：冠動脈造影を行い，その結果を治療法及び浅井，草川のスコアと比較した。

〔対象〕：本院小児科に入院した患児53例で，スコアの高いもの，親の希望の強いもの，重症感のあるもの等で，アットランダムではない。

〔結果〕：①スコアとの関係

患児53名中冠動脈病変のあったもの9例で17%であった。正常者44例のスコアは平均  $4.7 \pm 3.4$  でその分布は

0~15点であった。異常者9名のスコア分布は3~12点，平均  $8.2 \pm 2.5$  であった。スコア9点以上の者11名中異常者は4例(36%)，スコア6~8点の者13例中4例(30%)に異常が見られた。スコア5点以下の者29例中異常者は1例(3%)のみであった。スコアの項目別に見ると1. 発熱期間の長いもの，2. 再発熱のあるもの，3. 血沈正常化の遅れたもの，に冠病変の存在するものが多かった。

②治療法との関係

ステロイド使用群21例中4例(20%)に冠病変が見つかり，ステロイド使用非使用群32名に異常のあったものは5例(16%)であった。以下各治療法別冠動脈病変の

出現率を列記すると、①ステロイド単独使用 6 例中 0 例 (0%)、2. ステロイド、アスピリン併用例中 3 例 (33%)

3. ステロイド・アスピリン・ワーファリン併用例 5 例中 1 例 (20%)

4. ステロイド・ワーファリン 1 例中 0 例 (0%)

5. アスピリン単独使用 15 例中 1 例 (7%)

6. アスピリン・ワーファリン併用例 16 例中 4 例 (25%)

7. 抗生剤単独使用 1 例中 0 例 (0%)

## 川崎病におけるアスピリン療法の検討

——とくにアスピリン血中濃度、血小板凝集能について——

久留米大学小児科 加藤 裕 久  
横山 隆  
小池 茂 之

川崎病の原因がまだ不明であるため原因的治療は現在のところ望めない。しかし川崎病による急死や虚血性心臓病を予防するという診療上さしこまれた問題がある。今までのいくつかの治療を冠動脈瘤の発生頻度から評価してみるとアスピリン療法の有用性が示唆され、また 30 mg/kg のアスピリンは血小板凝集能も抑制し (図 1)、血栓予防にも有効であろうと考えられた。今回はさらにアスピリンのもつ抗炎症作用に期待しアスピリンの量について検討を加えたので報告する。

方法：川崎病患児をアスピリン非投与群、アスピリン 30 mg/kg 投与群、100~150 mg/kg 大量投与群の 3 群に分けて、それぞれ血中サリチル酸濃度と血小板凝集能を観察した。

血中サリチル酸濃度は、単味のアスピリンを分 3 で投与し、約 3 時間後の濃度を Keller の方法で測定した。

血小板凝集能は、ブライストン社のアグリゴメーターを使用し、ADP による凝集能を測定した。

成績：(1) 血中サリチル酸濃度は、アスピリン 150 mg/kg 投与群でも急性期には 10mg/dl 以下と低値で、急性期を過ぎるにつれ急に上昇する傾向がみられた (図 2)。

(2) 血小板凝集能は、アスピリン非投与群では、第 2 病週付近で亢進がみられ、アスピリン 30 mg/kg 投与群ではこの亢進の抑制がみられた。逆に、100~150mg/kg 大量投与群では、この抑制がみられなかった (図 1)。

以上であった。なお今回は造影時期との関係は考慮しなかった。

### 〔結論〕

①浅井、草川のスコアの有用性が認められたがスコア別の冠病変の出現頻度は低いようである。

②治療法との関係においては例数が少く断言はできないが、ステロイドとアスピリンでは差が少いように見える。

考按：一般に若年性関節リウマチなどのリウマチ性炎症に対しては、アスピリン 80~130 mg/kg で血中濃度 20~30 mg/dl が、抗炎症作用を期待できるとされている。これに対し川崎病の急性期では、150 mg/kg のアス

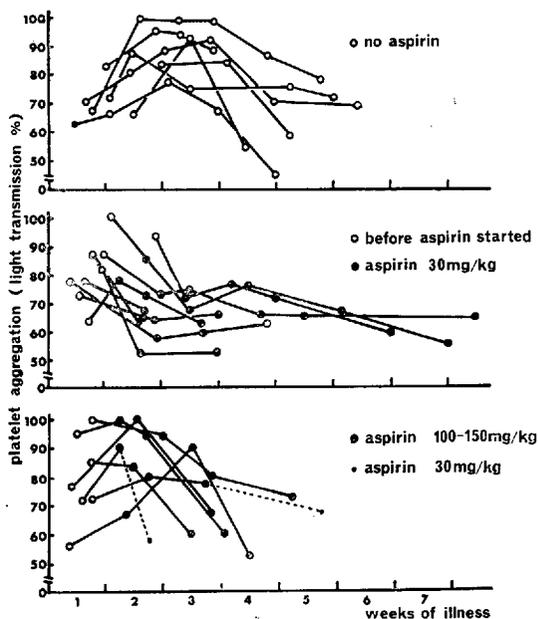
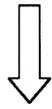


図 1 Platelet Aggregation in Kawasaki Disease



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



[目的] : 冠動脈病変の発生を防止する為に最良の治療法を見いだす事

(2)冠動脈病変と臨床症状特に浅井,草川のスコアー表との相関を見る事